南ジャカルタの動物シェルター（Pondok Pengayom Satwa）の保護された仔犬たち（筆者撮影）

インドネシア犬事情

濱田美紀

インドネシアでは犬はあまり歓迎されない動物である。イスラームでは犬は不浄なもの、特に犬の唾液は不浄であるとされるため、犬に舐められることは避けなければいけない。が、犬にとって舐めることは大切な感情表現なので、舐めるなと注文することは難しい。そのためムスリムは自ずと犬を遠ざけるようになる。

しかし、インドネシアに犬がいないわけではない。確かにバンコクの街中を悠然と歩く、もしくは平然と眠りこける犬たちのように、ジャカルタの大通りを歩く野良犬を見かけることはない。しかし、ヒンズー教徒が多いバリ島では、ホテル地区をはずれて居住地に入ると、飼い犬・野良犬とも区別なく（区別できず）いたるところで見かける。バリ島の犬はバンコクの犬と同じくそこかしこでのんびりと寝そべっている。その傍らでは、竹製の簡素なベンチの上で人間もまたのんびり寝そべっている。

仔犬をジャカルタのシェルターから引き取った。シェルターとは捨てられた犬猫を保護し、里親をさがすところであるが、ジャカルタにそのようなものがあるとは、はじめ考えもしなかった。しかし、南ジャカルタの動物園の近くの大きな敷地にシェルターがあった。そのシェルターではいろいろな種類の成犬が大きなケージにいれられ（誰が捨てたのか純血の柴犬もいた）、二〇匹は超える仔犬たちが、広い空間で遊び、じゃれ合い、ご飯をもらっていた。どれくらいの犬たちが新しい飼い主を見つけられるのかわからないが、みつからなければずっとここにいるのだろう、というおおらかな雰囲気が漂っている。その傍を印の紐をつけた太った猫たちが堂々と歩いている。そこには、保護の数日後には炭素ガスによる窒息死という最も苦しい形で殺処分する日本の保護センターにみる陰湿さはない。

ペットを飼うことが一般的でないため動物病院は数が限られる。そんな中アメリカ帰りの知的な女医にお世話になった。飼い犬はメスだったので、避妊手術をした。手術の痕をみると、桃色のお腹にうっすらと白い線が残る程度である。そんな話をしてインドネシア人の友人に犬のお腹を見せた。その瞬間、彼女は両手で頭を覆った。「負けた…」。「私も人間の病院なんかじゃなく、動物病院にいってアメリカ帰りの先生に手術してもらうべきだった…」。冗談とはいえ盲腸か何かの痕が無残に残った彼女のお腹を見ると、あながち冗談とも笑い飛ばせず、彼女のお腹にひたすら同情した。

結局、ジャカルタで犬を飼うのは、ムスリム以外のお金持ちか外国人である。お金持ちにとってはステータスシンボルなのか、大型犬が好まれる。二〇畳超の部屋を犬たちにあてがい、専属のお手伝いさんが世話をしているところもあった。夕方になると大きな犬を男のお手伝いさんが全速力で走らせて散歩（?）している姿も見かけた。

このようなお金持ちならいざしらず、外国人とはいえ普通の人間が貧富の差の大きいインドネシアを知る中で、犬を飼うのは気がひける時がある。病気になれば、犬が苦手な運転手に気遣い遠くの病院まで運ぶ。支払った薬代や入院費をお手伝いさんの月給と比べると、誰に言うわけでもないが申し訳ない気分になる。帰国が近づいた時、多くの人が犬に声をかけた。「おまえ日本に行くんだ」。「いいな、飛行機に乗るんだ」。「おまえ日本の犬になるんだ」。日本の犬になることが幸せかどうかわからないが、「飛行機に乗って日本に行く」犬に話しかける人たちをみるたび、少しだけ複雑な気持ちになった。それから何年か経ち、今、そのインドネシアの犬は、めっぽう寒さには弱いものの日本の犬になったようにみえる。

（はまだ　みき／アジア経済研究所開発研究センター）